

スコトッスはそれを人類共通のものとするために、合理主義の神学者として最大限の努力をしたということは十分に言えることだろう。そして恐らくこれがスコトッスの合理主義が「神秘」に迫りえたぎりぎりの所なのである。

意見 眼前の個，出会いの語り得ざるもの

谷 隆 一 郎

八木氏の御提題を聴いて感じたのは、いささか逆説的に言えば、スコトッスという人はもしかしてたとえばトマスやボナヴェントゥラといった人々よりも、眼前一箇のこのもの、この人に凝縮した神秘をひたすら問題にしようとしたのではないかということである。スコトッスには恐らく、通俗的で平板な個、つまりはじめからそれぞれの限定された実体が確保されているような個は関心がなく、従ってまた存在階層の安定した秩序を順次に語ってゆくような語り口は性に合わず、却ってむしろ、いわば存在物の全体が一度び浮動化され、このもの、この人へのわたしの意志の関わりが創造の現場を一身に担うかのような凝縮した一点こそが関心事であったのではなかろうか。筆者はスコトッスの文脈に明るくないのでこれは漠たる予感でしかないのだが、少くとも、「カリタスの注入によって聖霊が人の心のうちに住まうことで形相的に無限なものが個のうちに含まれる」とか、「個は無限な神との関わりをもちうる唯一の場である」といった表現は、古来ヒュポスタシスの結合（神性の顕現・受肉した個）といった仕方では指し示されてきたキリストの姿を、あえてある種の合理的な問題連関の中で問い開こうとする意図を秘めていると考えられるのである。

とすれば、スコトッスが無限性に関わりゆく人間的意志・自由に、いわば神・存在の現成を担う究極の役割を託すとき、それは必ずしもわれわれの恣意的偶然的な意志などではなく、根底では己れが全く蔑されることにおける神的靈の働きの生起・コンティンゲンティアであるような意志ではなかろうか。そしてこの意味では、スコトッスもまた、フランシスコとの出会い、キリストとの出会いを、いわば創造の加圧を受けた個を凝視することによって反省していったのではないかと思われるのである。

ところで長倉女史の御提題は、真にその名に値する「人との出会い」がいかなるものであり得るかを証示しているものと思われた。というのも、ボナヴェントゥラは生前のフランシスコには出会っていないというが、師の姿を身に帯びている人々の言葉を通してフランシスコと出会い、またそのことにおいて同時に、われわれの成りゆくべき究極の範型とも言うべきキリストに出会ったと考えられるからである。とすれば、われわれにあって人との出会いというものは、個人と個人との閉ざされた境域を超え、その収斂する原初的な一点に触れる度合に応じて、真に存続する意味を有し、そうでなければすべての悲喜交々の出来事はただはかなく非存在の淵を漂うほかないのであろう。恐らくすべての自然本性的な事物は、人もものも相俟って神の顕現・受肉の全一的なかたちにとりゆくことへと招かれているが、そうした変容・完成はただ、人が自らの意志・自由を捧げつつ、神的な霊を宿す器と成りゆく道として生起するほかないであろう。

しかるに何人もさまざまなものや人に、そして畢竟自己自身に執着する性を完全には免れておらず、また聖人とはそうした己れのうちなる罪の根底をしも凝視し得た人であったとすれば、神の顕現ないし神への関与の道はあくまで途上のものであり、不漸の創造、絶えざる生成を旨とすると考えられよう。ボナヴェントゥラの言う「浄化・照明・完成」の道がすぐれて実践的な論として展開されるゆえんでもあろう。そして古来、「キリストの受難に対する共苦」を生きる人々において、そうした道行きの成立根拠として、つねにかつ同時にキリストの現存が証しされている。すなわち、かつてこの地に生起したことでなければ、生身のわれわれにとって、それへととりゆく真の範型とも根拠ともなり得ないと言えよう。歴史における受肉と受難との出来事がそのようにつねに同時に甦るとは、まことに不思議な事態であるが、それは単に客体的事実などという領域を超えたものであり、すべて人がそれぞれの経験を通して何ほどか共苦へととりゆくことのうちに観想さるべきものであろう。